

「九曜紋浮舟蒔絵匂箱」について

たち花の小嶋は色も変らじを この浮舟ぞゆくへ知られぬ

匂宮に伴われた浮舟が、宇治川対岸の留守居に向かう舟中で詠んだ歌である。白々と雪の降り積もり、有明の月の澄み渡る折、2人が川中にある橋の小島に目をやれば、趣のある常磐木が繁っている。いつまでも青々と繁る木に、匂宮の変わらぬ心を重ね合わせるも、薫と匂宮に思いを寄せられ煩悶していた浮舟は、水に浮かぶ舟のように行く末も知れない胸中を吐露するのであった。〔『源氏物語』第五十一帖「浮舟」〕

さて、本館蔵「九曜紋浮舟蒔絵匂箱」は、この源氏物語を意匠化したもので、U.A.カザール氏よりともに寄贈された九曜紋蒔絵婚礼調度(全24件※)と一具をなすと考えられている。このうち源氏物語を題材とする調度は、おもに「浮舟」に取材した匂箱と、「紅葉賀」「夕霧」に取材した手箱の2件が存在するのみである。さらに伊勢物語を題材とする硯箱を除けば、常緑の吉祥文様である松橋を蒔絵している調度類が過半数を占める。意匠を異にしなが、いずれも九曜紋を有する婚礼調度群とみなされているが、家紋から所用者を特定することは難しく、来歴は定かではない。ここでは匂箱における意匠や技法を中心に紹介しよう。

匂箱は香道具をおさめるための長方形、四方入角、合口造の箱で、手提香盆、橐形香合、入角重香合、角切重香合、壺形焚殻入、竹幹形三足香炉をおさめている。薫物に心を砕いた匂宮と匂箱とを掛けたのだろうか。

蓋表には御殿に2人の男性、身の正面には馬上の男性と3人の付人たち、裏正面には舟に乗る男女と舟人を描いている。話の筋から、こちらを向いて御殿にたたずむ男性と

馬上の男性とは同一人物であり、人目をはばかって浮舟に会いに行く匂宮の姿を描いていると思われる。一連の話は、浮舟の立場からすれば悲劇の一言に尽きるものの、匂宮の立場からすれば、思慕する女性を宇治に尋ねる恋愛譚といえるだろう。明暗の分かれる物語は婚礼調度の意匠としてふさわしくないようであるが、源氏物語は中世を通じて物語の内容から離れ、和歌や登場人物は意匠化してきている。そして匂箱に限らず方形の立体物に表す題材は、その箱の顔ともいえる蓋表(と蓋裏)や身の正面

に配することが比較的多い。しかし、本館蔵の匂箱は身の裏正面に浮舟を蒔絵している点で興味深い。表沙汰にできない逢瀬であるがゆえに裏正面に蒔絵しているのだろうか、あるいは蓋表と身の正面は浮舟とは異なる帖に拠っているのだろうか、残念ながらこれらを示す目録などはない。

ところで、同様に源氏物語の各帖に取材し、登場人物を描いた作例は少なからず存在しているようで、東京国立博物館蔵「源氏

蒔絵沈箱」「源氏蒔絵櫛箱」「胡蝶蒔絵鏡台」「源氏蒔絵鏡箱」「源氏蒔絵搔上箱」であるとか、平山堂の「創業三十五週年記念展観入札會」(東京美術倶楽部 昭和7年[1932])所収の作例が知られる。中世では文学作品などの登場人物を直接描かずに景物を蒔絵する「留守模様」の手法をとることが多いが、近世以降、人物を直接描く作例も現れるようになる。類例はこれにとどまらないはずで、今後も調査が必要である。

技法に注目すると、匂箱の総体に濃い梨子地を蒔きつけ、御殿、人物、前栽、岩などを高蒔絵し、宇治川の波を研出蒔絵と付描とで表している。岩や木の洞には金属板を凹状に嵌め込む極込や、凸状に貼り付ける臍をほどこし、雲や岩などには方形の金銀切金を置いてアクセントとしている。今でこそ土坡や岩上の銀切金は黒ずんでみえるが、当初は白銀のごとき雪を表していたのだろう。

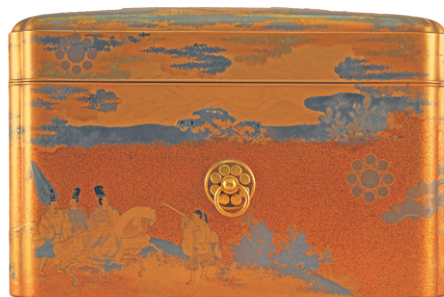
蓋表には九曜紋を3つ、身の四方には2つずつ、計11の紋を散らしている。さらに身の長側面には、金銅製魚々子地の紐金具に九曜紋を彫り表している。なお、紐金具に結ばれていたと思われる紫房の紐は、箱内に保管されている。ここでは内容品に関する詳述を控えるが、いずれも濃い梨子地に手の込んだ技法を駆使しており、格式の高い香

道具といえる。管見の限り、本館蔵の匂箱は意匠表現や技法などから、江戸時代初期まで遡らず、中期の作と思われる。今後、より詳しい技法研究が必要になるだろう。

匂箱には謎が満ちている。行き着く先はどこか、答えを探す舟旅は今始まったばかりである。

※作品数は数え方により異なる。

(菊地泰子)



(上)九曜紋浮舟蒔絵匂箱 (中)正面 (下)裏正面
江戸時代中期 20.8×24.0×17.7 (cm)
本館蔵(カザールコレクション)